北海学園大学附属図書館報

図書館だより

1988．5．17

第10巻1号

通巻105号

Bulletin of the Hokkai Gakuen University Library

豊平モンパルナス

絵と文・國田祐作

パリのモンパルナス、今世紀の初頭にこれほど芸術家の魂を揺さぶった名前はないだろう。世界の‘解放区’として，人種・国籍を問わず詩人，画家，音楽家を白熱させたルツボの街はほとんど伝説的である。そこには，しかし，山があるわけではない。モンマルトルほどの小高い丘さえ，ない。カルティエ・ラタンの学生たちが，採石場の堆土の山をミューズの女神の宿るギリシャのパルナッソスの山に見立てて，戯れに名付けたのである。彼らの詩的霊感が美の狩人たちに宿ったのだ。

私は学園キャンパス周辺のスケッチを並べて，学内で小さな展示をし，それに「豊平モンパルナス」と名付けた。むかしのリンゴ園や農地を区切る道がそのままに入り組んだ露路をつくり，醸造所や工場が残るこの周辺は，たとえば冬の夜などに思いがけない風景を見せる。シャガールが終生描き続けた故郷ヴィテブスクの町並みが突然目の前に現われたりする。白樺を浮き立たせる緑の家がまるで舞台装置のように私の目を奪う。

実際，街は，人がそこに生きる舞台装置である。明治のはじめ，ひとりの男が円山の中腹から茫漠たる原野を見下ろし，そこを貫く豊平川に思いを寄せた。賀茂川……と呟いたとき，彼にはこの地を北の京都にする構想がひらめいた。条里が布かれ，札幌のまちが創られた。賀茂川は北より南へ下り，豊平川は南から北へ上る。それを教えてくれたのは京都から札幌に学ぶ女子学生である。

小アルプスにたれよ朝日の雪捨場　潤一

という俳句がある。

時にはうとましい雪捨場の山を，朝日に輝く純白のアルプスと観ずるのは，作者の心にモンパルナスが宿るからである。若い人の想像力が街を新しい貌にすることは稀なことではない。町の人々が学生を誇りにしてきたのは経済的効果などというケチな料簡ではない。若い人の想像力とつややかな希望が，活きた姿として街に溢れているからである。

（くにた　ゆうさく　教養部教授）

鎮魂の空間

――私的図書館論――

図書館長　菱　川　善　夫

４月から，思いがけず図書館長の椅子をけがすことになったのだが，目下のところは，まだ見習いのようなもので，図書館の中をうろうろし，図書館という巨大な建物とも，まだうまく和解できていない，というのが正直な感想である。

だが，図書館に行くと心が落ち着く，という点では，昔も今もかわりはない。

図書館は，本を読み，必要な資料に目を通すところではあるが，しかし，本を読むためにだけ，図書館があるのだ，という考え方は，あまりにも狭い考え方のように思われる。

私も学生時代から，ずいぶんいろいろな図書館の御世話になってきた。知的な飢えをみたすことのできるよろこびが，なんといっても，図書館の与えてくれる最大の恩恵であることはいうまでもない。が，同時に，図書館に行って，心を鎮め心を自分の中心にむかって集めることのできるよろこびも，それにおとらず大きなものがあった。むしろ学生時代には，その目的のために図書館に行き，そこでノートや原稿用紙に，自分自身の言葉を書いたものである。

つまり図書館は，私にとっては，魂鎮めの場所，鎮魂の領域，自己自身との対話の場所でもあったということになる。

外にむかって魂が逃げださないように，魂を集め，それを体の奥深く鎮めることのできる場所―それが図書館の持つ，もうひとつの大事な機能なのではないだろうか。

魂を鎮めるためには，静寂が必要である。それと明るすぎず暗すぎず，一種の薄明のような空間が必要だ。たいていの図書館ではその二つが約束されている。どんなに人がいても騒々しいということのない場所，そういう場所を大学の中に求めるとしたら，学生には図書館が最適の場所だといってよい。

だから，私は，魂鎮めの場所としても，図書館を利用する学生がもっと増えてほしいと願っている。魂を鎮め，魂に新しい活力を賦与することができなくて，どうして人間の想像力を高めることができるだろう。

近代的な図書館は，ビデオや音響装置をととのえ，〈読む〉だけではなく，〈視る〉〈聴く〉という感覚の要望にもこたえられるようにするのが，近代的な図書館の条件になってきている。情報をすばやく，しかも直接的，かつ立体的に享受するために，そのような近代化は，当然積極的に進められなくてはなるまい。しかし，どんなに設備の近代化が進んでも，図書館が，基本的には魂のみそぎの場所だ，という基本的な性格が崩れては困る。必ずどこかにその聖なる空間を確保しておくのが図書館だと，頑固に私は信じている。

魂の再生のためには，「こもる」ということが必要である。天照らす大神が，天の岩戸に身をかくされた個所が，古事記では，「天の岩屋戸を開きてさし隠(こも)りまじき」と書かれてあるが，天照らす大神ならずとも，人は時々閉じこもることが必要なのではないか。天照らす大神も，閉じこもることによって，より神秘な力を発揮することができたはずだ。

とっぴな発想だが，天の岩戸が，図書館というものの原初的な形だと思われてならない。もちろん，古事記には，天照らす大神が，天の岩戸の中で本を読んでいた，などとは書かれてはいない。が，隠(こも)ることで，確実に心を鎮めることができたはずである。

この古事記神話にならい，図書館にこもって，しかるのち，天の宇受売(うずめ)の命の踊るススキノへと足を運ぶのが，古代に学ぶ現代人の知恵というべきではあるまいか。

（ひしかわ　よしお　教養部教授）

自著を語る―⑧

健康体力づくりのスポーツ科学

同朋社刊（1987）　　竹　田　憲　司

いま，日本のフィットネスの情報源はアメリカである。

そして，自らの健康を自らの責任でという意識の強いアメリカに比べて，日本のそれはまさにファッションである。

あやしげなレオタードに身をつつみ，エアロビックダンスさえやっていればスリムになれると，ネコもシャクシも，いや，ネコどころか，ブタがレオタードを着て踊っている。

ジョギングが脚や心臓に危ない？　だからウォーキングが良いという。となると知ったふりの大先生が「脚を大きく開いて足先を45度に上げ，腕は……」と講釈する。うるせーつーの！　歩き方まで教えてもらわないと歩けないのかッ！

肥満は万病のモトという。フムフムとおじさんはうなずいてしまう。

ところが，ヤセるためには，おやつを食べ，食べ終るとトイレにかけこみ吐き出してしまう娘がいるというのだから，腰を抜かしてしまう。

ファッションとしてのフィットネスは，何が正しいのかを我々にスルドク問いかけている。

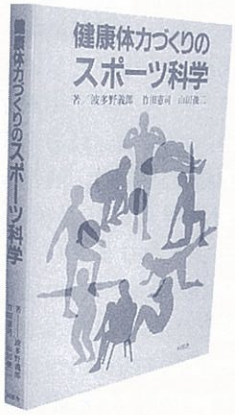
本来，フィットネスは精神的にも栄養学的にも総合された概念であるが，いまでは，健康のための体力づくりというイメージが強くなってきているし，そうとらえてもさしつかえはなかろう。

それだけに，フィットネスをファッションから科学へとひきもどさなくてはならない。しかも，実用性の高いものへと発展させる必要がある。

などと，まあ，雄々しく考えてできたのがこの本なのである。

健康をどうとらえるか，ここに我々は，「ウェルネス」という新しい健康観をあてはめ，運動の必要性，栄養の問題，そしてストレスマネージメントを考える土台とした。

1980年に入ってアメリカで広く使われるようになった「ウェルネス」は，日常の生活において，健康を維持・増進するためにどれだけ努力をしているかという姿勢を問題にし，生活場面の一つひとつを客観視することが強調されている。



そんなこんなで，「ウェルネス」「フィットネス」を柱に，もっとも新しい健康・体力づくりについてこの本で語ることができたと思っている。

1984年，LAオリンピックの折，HEALTH & PHYSICAL EDUCATION CONSULTATIONの代表団として，東京学芸大学の波多野教授と御一緒させてもらった。

その後，私は1人アメリカで在外研修をして帰国した折，波多野教授と再会した。

アメリカでの健康と運動との関わり，ウェルネスムーブメントの日本のとりくみ方など，アメリカ事情にくわしい波多野教授と意見を交わしているとき，この本の出版を思いたったのである。

何が正しいのかをみきわめながら健康を論じ，しかも実用性をねらうのは，きわめて困難ではあったが，我々はあえてそれをねらってみた。

春になったみたいだし，心なごやかに，どら一丁からだを動かしてみるべや。

（たけだ　けんじ　教養部教授）

図書館では今……

斎　藤　和　夫

新装なって昨年４月に開館した図書館，１年を経過し入館者総数は205,423名（５月11日現在）と旧館時代にくらべ飛躍的な利用者を迎えたことになります。新しい器には新しい感覚を，と館員全員が心を揃えて出発をしました。

さて，そんななかで図書館には乗越えなければならない大きな問題があります。

学術情報量の激増，情報媒体の多様性，学際的研究領域の増大など大学図書館を取巻く事情は年々変化しておりますし，それに伴う図書館の果たす役割の変化については，内外の図書館界で必ず討議題とされるところであります。

その一部をご紹介いたしますと，まず図書館の重要な役割として，利用者の求める情報の所在を確認して迅速に提供することが挙げられます。これに的確に対応するためには，その情報の質，量，情報媒体が急激に変化するなかで，まず図書館自身が伝統的な図書館のイメージから脱皮をしなければなりません。

従来の大学図書館はその基本的機能である学術情報の収集・保存・提供のうち，保存機能を中心に活動してきた傾向が強く，所蔵する資料が充分活用されていないという欠点がありました。

これからは，学内ではインフォメーションセンターとしての機能がより多く要求されましょうし，図書館職員にはゲィトキーパーとしての職能が要求されてくるだろうと思います。

このことは，これから多種多様の情報収集を単独館で努めるのではなく，ある種の協定に基づいた情報の分担収集，分担保存を考えざるを得なくなること，そして情報が分散すればするほど，多くの資料の中から利用者の求める情報の存否や所在を正確に把握し，利用者へ一早く提供できる力を持たなければならないということになります。

全国の大学図書館の所蔵統計をみますと増加の一途を辿っております。が，しかし現在国内で刊行される図書数は10万とも15万冊ともいわれておりますので，有限とはいいながらもこれだけの本を毎年各大学の図書館で全数購入することは経済的にも容積的にも到底無理なことです。

そのため，広く他大学と相互補完の関係を持とう，資源を相互に利用しあおうという考えかたが生まれてきました。

このように大学図書館は国内外の情報化社会の波のなかで大きく姿を変えていかなければ充分な機能を果たすことが出来なくなりつつあります。

このことは，自分の大学内の資料整備だけでは研究者や学生の要求に応えきれなくなってきているということにもなります。

一方，本館では国内外の大学図書館や公共図書館との間で毎年相当数の貸出や借受けなどの相互利用の実績を持っております。これが年々増加の傾向にあることなどから，図書館業務の大幅な見直しをしなければいけないと考えております。

図書館の仕事は大きく発注，受入，整理，検索そして貸出しや返本業務，と分類することができます。これら手作業をもし電算機によって処理することができるならば，資料を迅速に利用者に提供できるという点では現状の数倍の威力を発揮することになります。

また，外部の書誌情報センターと接続することによって，膨大な量と，最良の質の目録情報が得られることになります。

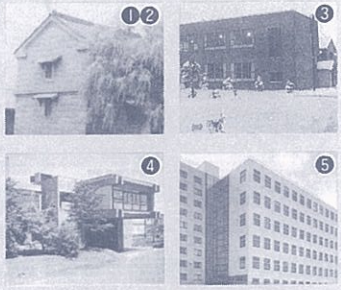
より高度のサービスとより迅速で確かな学術情報資料を求められている本学図書館では，「必要とする学術資料を必要とする利用者に」提供しなければいけないという課題を様々な角度から検討をしているところであります。

（さいとう　かずお　図書館事務長）

北海学園と図書館の歩み

法人名	年度	沿　　革
北海英語学校	明治18年	大津和多理校長のもと南２条西１丁目禁酒会の建物を借用して開校
	明治21年	浅羽靖校長となり，北４条西１丁目旧巡査練習所を借り受けて講義を開始
	明治21年	大通り西４丁目区町会所を校舎に使用
	明治27年	校舎建築
	明治34年	南５条東２丁目旧豊水小学校々舎を借り受けて北海道認可の中学部を開設
私立北海中学校	明治37年	補習科（中学４年相当）設置認可
	明治38年	文部省認可の私立北海中学校となる
	明治39年	豊平の現在地に校地を購入　明治41年迄に校舎を建設し移転
	大正３年	浅羽靖校長逝去
財団法人 私立北海中学校	大正３年	法人名称変更
財団法人 北海中学校	大正８年	法人名称変更
	大正９年	札幌商業学校開設
財団法人 苗邨学園	昭和８年	法人名称変更
	昭和19年	札幌豊陵工業学校開設
	昭和23年	北海高校，札幌商業高校，同定時制課程，豊陵工業高校となり，旧３年までは併置中学校となる
財団法人 北海学園	昭和24年	法人名，財団法人北海学園に改称
	昭和25年	北海短期大学を開設
学校法人 北海学園	昭和26年	制度改正により法人名改称
	昭和27年	北海学園大学経済学部１部開設
	昭和32年	開発研究所開設
	昭和37年	北海学園短期大学に土木科開設
	昭和39年	法学部１部・２部開設
	昭和40年	経済学部経営学科開設
	昭和43年	工学部土木工学科，建築学科開設
	昭和45年	大学院経済研究科開設
	昭和52年	北海学園北見大学商学部開設
	昭和59年	北海学園北見女子短期大学経営学科開設
	昭和61年	北海学園大学大学院法学研究科開設
	昭和62年	工学部電子情報工学科開設

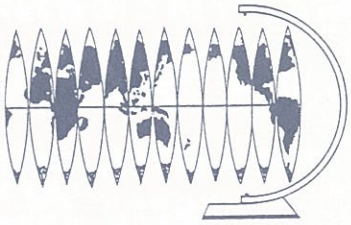
図書館の変遷



明治42年	図書館設立案策定 購入・寄贈依頼開始
明治44年	皇太子行啓 ①北駕文庫設立 蔵書数　15,143冊 書　庫　石造平屋12坪 閲覧室　木造平屋12坪
大正３年	財団法人北駕文庫設立 蔵書数　31,000冊
大正４年	財団法人北駕文庫解散 北海中学校に移管
大正５年	②図書館増築 書庫　石造　２階24坪 閲覧室　木造平屋12坪
昭和27年	北海学園大学に移管
昭和28年	③図書館新築 鉄筋　２階建 閲覧室　70坪 蔵書数　和・1,053冊 洋・780冊
昭和43年	④図書館新築 鉄筋Ｂ１階・地上３階 閲覧室　262坪 蔵書数 和・90,563冊 洋・24,564冊
昭和62年	⑤図書館新築 鉄筋Ｂ１階・地上６階 閲覧室　628坪 蔵書数 和・216,242冊 洋・90,169冊

AIR MAIL

アラスカ紀行



大　江　敏　美

この頃のニュースの話題にのぼる人々で，都会の生活を逃れて僻地の農家を求めてそこに住んだり，生計の場を移したりしている例がある。山里指向は，古来日本人の心のなかに潜んでいるものであるが，特に最近，人間の周りから自然環境が消失するにつれ，山里を慕う心理が顕在化してきているのは，登山や秘境探検の盛行にも見られる通りで，生物的人間の本能とも言えようか。

アメリカの都会脱出者にとっての山里は，日本の4倍の面積を持ち，40万の住民しか住んでいないアラスカと言える。事実，アラスカを歩いていると，ここかしこで隠者的住人に遭遇する。アリューシャン列島の小島で私が会った白人一家は，その典型的な例で，親子4人で，不在地主の持つ羊の群れの管理をして暮らしていた。子供は通信教育を受けており，月に一度の水陸両用のグラマン・グース小型機の訪れが文明世界との唯一の接触である。

とは言っても，ここは米ソ間における一触即発の臨戦態勢の整った戦略的最前線でもあり，上空には軍事電波が飛び交い，偵察衛星が虎視眈々と査察している物騒な山里とも言える。しかし，二人の子供は，山野で罠をかけて狐を捕り，その毛皮を売って小遣銭を稼ぐといった羨ましいような生活ぶりである。

この島の入江は，天然の良港となっている。戦時中，米国太平洋艦隊がここを基地として日本を狙っていたのは，真夏ですら頻繁に全島を包みこむ霧が絶好の隠れ家を提供していたからである。当時の軍事施設は，今や，兵（つわもの）どもが夢の跡そのままに残骸を曝している。

アラスカは，明治維新前年の1867年にアメリカ政府が当時の720万ドルでロシアから購入した。政府が毛皮業者に課した税金により数年以内にその全額を回収したから，事実上ただの買い物であった。往時の名残として，アラスカには人名，地名，会社名でロシア語起源のものが残っており，又荘厳なイコン像を持つロシア正教会が各地に存続している。仮に，この取引がなかったとしたら，現在の米ソ核対決はソヴィエト側に極めて有利に展開していたことであろう。全米統計にとって，いつもアラスカ州だけが特異の傾向を示すのは，その人口の45％が公務員という異常性にある。その中で，かなりの部分が軍人によって占められているということは，この州が対ソ戦略の要(かなめ)を形成しているからである。

このアラスカでの私の忘れられない思い出は，エスキモーの最高リーダーであったフランク安田の孫娘と会ったことである。石巻の安田少年の波乱万丈の生涯は，商船のボーイとして渡米したことから始まる。運命は彼を北極圏のエスキモー集落に導く。そこで彼は，鯨狩りの名人となり，酋長の娘を妻とするに至る。やがてエスキモー族の最高実力者の一人となるが，戦時中日系人であるがために強制隔離されてしまう。新田次郎著「アラスカ物語」の主人公が彼なのである。州都ジュノーでの食事中，隣り合わせて話しあっているうち孫娘であることが判明し，驚かされたわけである。エスキモーの人々は，容貌が日本人によく似ている上，日本人よりも人なつこいという特性をもっている。彼女は州政府で原住民の福祉関係の部局に勤めているということであった。

（おおえ　としみ・教養部教授）

新着図書(選)－経済

講座人間関係の心理１－２　家族の人間関係１，２　島田一男監修　ブレーン出版
収奪された大地　―ラテンアメリカ五百年―　E．ガレアーノ著　新評論
現代経済学講義　早見弘〔ほか〕著　中央経済社
経済　長洲一二著　一橋出版
都市生活の経済学　佐々木佳代編著　ミネルヴァ書房
経済学史　小林昇編，新版　有斐閣
ジェヴォンズ評伝　R．ケーネカンプ著　慶應通信
マクロ経済学　駄田井正〔ほか〕著　晃洋書房
近代経済学　―経済分析の基礎理論―　新開陽一〔ほか〕著　新版　有斐閣
価格決定の原理と実践　A．ガボール著　ミネルヴァ書房
現代日本の消費経済　出石康子編著　ミネルヴァ書房
各県別路地裏の経済学１　竹内宏著　中央公論社
中国経済発展の新戦略　―壮大なドラマの幕開け―　馬洪著　有斐閣
アジアと日本100年の経済ドラマ　―マレー半島興隆記―　浅野孝夫著　東洋経済新報社
経済改革の可能性　―ハンガリーの経験と展望―　J．コルナイ著　岩波書店
国際経済　池間誠〔ほか〕著　有斐閣
経営学　中村常次郎編　第３版　有斐閣
公共企業論　一瀬智司〔ほか〕編　新版　有斐閣
感性時代の人事戦略　―「六〇年代」の異質環境を読む―　西武コミュニティ・カレッジ流通産業研究所編　ダイヤモンド社
イギリス経営財務論　―イギリス中小企業の財務管理―　J．ベイツ著　白桃書房
現代企業成果論　真船洋之助著　千倉書房
すぐ使えて役立つパソコン経営分析　オフケン著　ダイヤモンド社
日本の金融と銀行　―実践ゼミナール―　鈴木淑夫編　東洋経済新報社
朝鮮銀行史　朝鮮銀行史研究会編　東洋経済新報社
現代の銀行独占　―金融自由化の政治経済学―　銀行問題研究会編　新日本出版社
銀行の周辺業務　―仕組みから実務手続まで―　金融財政事情研究会編（同編者）
変革期の銀行と証券　―「棲み分け」は可能か―　千田純一〔ほか〕著　有斐閣
ワールズ・マネー　―迫りくる「ペーパー・エコノミー」の破局―　マイケル・モフィット著　日本経済新聞社
日本の資本輸出　―対中国借款の研究―　国家資本輸出研究会編　多賀出版
コンピューター大百科　A. Ralston 編　朝倉書店
日本の食品産業　―21世紀を迎える―　１－３　農山漁村文化協会　１．技術　２．経営・経済　３．戦略・政策
事例による広告キャンペーンの実際　同文舘出版
流通構造と流通政策　―日本と西ドイツの比較―　E．バッツァー編　東洋経済新報社
新時代感覚の商業発想　―感覚マーケティングのすすめ―　西武百貨店池袋コミュニティ・カレッジ，流通産業研究所編　ダイヤモンド社
経済政策論を学ぶ　清水嘉治編　新版　有斐閣
国際経済関係論　―開拓期アメリカの経験とアジア―　板谷　茂著　新評論
軍隊式マネジメント比較　長谷川慶太郎著　プレジデント社
モンドラゴン　―現代生産協同組合の新展開―　H．トマス著　御茶の水書房
公企業財務管理　一瀬智司著　第２版　春秋社
日本企業読本　壹岐晃才編著　東洋経済新報社
西ドイツ企業の発想と行動　吉村　賢著　ダイヤモンド社

新着図書（選）－法律

ヴェーバーと丸山政治学　滝村隆一著　勁草書房
西洋政治史　北岡勲著　新訂版　御茶の水書房
市民の生活と警察　自由法曹団編著　イクォリティ
日本警察　腐触の構造　小林道雄著　講談社
天皇制警察と民衆　大日方純夫著　日本評論社
法の精神　上，中　モンテスキュー著　岩波書店
憲法概説　小嶋和司著　良書普及会
憲法　浦部法穂著　勁草書房
シェースの憲法思想　浦田一郎著　勁草書房
民法　半田正夫著　勁草書房
民法演習１　―民法総則―　田山輝明編著　成文堂
口述債権総論　前田達明著　成文堂
債権総論　高島平蔵著　成文堂
借家の法律相談　水本浩〔ほか〕編　新版　有斐閣
不動産登記法１―３　幾代通編　改訂版　三省堂
概説商法総則・商行為法　小沼喬著　啓文社
基本商法講義　―会社法―　長谷川雄一著　成文堂
会社法要説　蓮井良憲編　法律文化社
会社法要説　加藤勝郎編　青林書院
株式会社法概説　松井一郎著　中央経済社
手形法理の研究　長谷川雄一著　成文堂
手形・小切手法　大山俊彦〔ほか〕著　三省堂
最新手形法小切手法　田邊光政著　中央経済社
刑法　川端博著　勁草書房
対談刑法総論　福田平著　有斐閣
刑法各論講義ノート　日高義博著　勁草書房
刑法講義　―総論―　香川達夫著　第２版　成文堂
犯罪の現代史　―犯罪白書の分析から―　宮野彬著　三嶺書房
刑事政策講義　大谷實著　弘文堂
死刑囚からあなたへ　―国には殺されたくない―　日本死刑囚会議・麦の会編著　インパクト出版会
行刑の理論　吉田敏雄著　慶應通信
スパイ防止法がやってきた　―消すなわれらの表現―　浅野健一編著　社会評論社
国家秘密法は何を狙うか　―総批判―　茶本繁正［ほか］著　高文研
核時代の国家秘密法　上田誠吉著　大月書店
まんが国家秘密法　柳田邦夫原作　伊藤マサミ画　ペップ出版
民事の訴訟　―ある事件の発生から解決まで―　福永有利著　筑摩書房
迅速な裁判　―アメリカ民事訴訟の研究―　小島武司著　中央大学出版部
刑事訴訟法入門　藤木英雄［ほか］著　新版　有斐閣
刑事訴訟法25講　―論点法律学―　能勢弘之著　青木書院
著作権法概説　半田正夫著　第４版　一粒社
著作権ビジネス最前線　久保利英明著　改訂版　中央経済社
現代資料国際法　筒井若水著　有斐閣
国際私法　三浦正人編　改訂　青林書院
保険総論　―リスクマネジメントと保険の理論―　亀井利明著　同文舘
アメリカの税法　―連邦税・州税のすべて―　須田徹著　中央経済社
例解所得税　1987年版　牟田口賓著　中央経済社
新所得税教科書　1987版　牟田口賓著　中央経済社
社会保障法読本　荒木誠之著　改訂版　有斐閣
現代イギリスの労使関係　上　―自動車・鉄鋼産業の事例研究―　戸塚秀夫［ほか］著　東大出版会
売春対策の現況　総理府編　ぎょうせい
アメリカ犯罪株式会社　M．ショート著　時事通信社
子どもの非行に気づいたら　―親と教師が助ける年少非行児の成長―　小野修著　黎明書房
現代情死図鑑　岩川隆著　図書出版社

新着図書(選)－工学

パターン認識と部分空間法　E．オヤ著　産業図書
岩波理化学辞典　久保亮五〔ほか〕編　第4版　岩波書店
多変量解析のはなし　有馬哲著　東京図書
オペレーションズ・リサーチ入門　河原靖著　共立出版
力学　西村久著　森北出版
工科系の力学　滝本昇著　森北出版
圧縮性・粘性流体力学　―基礎と演習―　岩本順二郎著　東京電機大学出版局
光・電磁波論　三好旦六著　培風館
教師と学生のための化学実験　日本化学会編　東京化学同人
材料力学　宮本博著　裳華房
マイコンによる有限要素解析　―バージョン・アップ―　戸川隼人著　培風館
有限要素法　鷲津久一郎著　岩波書店
現代技術史論　黒岩俊郎著　東洋経済新報社
わが国の国土は整備されているか　―日本の公共事業―　「月刊政策」政治月報社
これだけは知っておきたい地盤工学の基礎知識　済木幸平著　鹿島出版会
擁壁及びカルバートの設計と考え方　岩松幸雄〔ほか〕著　改訂版　鹿島出版会
地すべり・斜面崩壊の予知と対策　渡正亮著　山海堂
新しいコンクリート工学　河野清〔ほか〕著　朝倉書店
実際に役立つ土木構造物の設計計算例　土木構造物設計計算例編集委員会編　新訂版　山海堂
よくわかる杭基礎の設計　矢作枢著　山海堂
道路土工　排水工指針　日本道路協会編　1982年改訂版（同編者）
人のための道と広場の舗装　―設備・施工要覧―　金井格〔ほか〕著　技報堂出版
橋梁工学　泉満明著　コロナ社
プレストレストコンクリート橋設計計算プログラム　小村敏編　近代図書
海洋施設の計画と設計　小林浩著　日刊工業新聞社
水環境の保全と再生　虫明功臣〔ほか〕編著　山海堂
概説海岸工学　尾崎晃〔ほか〕著　森北出版
環境アセスメントの実務　鹿島建設環境開発部編　鹿島出版会
民家ウォッチング事典　吉田桂二著　東京堂出版
鉄筋コンクリート構造　―理論と設計―　谷川恭雄〔ほか〕著　森北出版
絵でみる大工道具もの知り事典　永雄五十太著　井上書院
家づくりを成功させる本　―フローチャートからチェックリストまで―　丸谷博男著　彰国社
電子音響工学　永田邦一著　朝倉書店
ディジタル画像通信　釜江尚彦著　産業図書
フェアライト　平賀貞太郎〔ほか〕共著　丸善
ＶＬＳＩの薄膜技術　伊藤隆司〔ほか〕著　丸善
科学者のためのPASCAL入門　J.W.クーパー著　産業図書
塗装技術ハンドブック　日本塗装技術協会編　日刊工業新聞社
都市交通　―21世野に向かって―　角本良平著　晃洋書房

ビデオテープ紹介

KAJIMA VIDEO PACK VHS

鹿島出版会情報システム事業部

建設工法を詳しく知るためには，工事現場を見学するだけでは限度がある。説明しにくいことも視聴覚のメディアを通じて理解することが効果的……

建築，土木技術，工法，交通，環境等収録。39巻収集済，63年度さらに38巻収集予定。

工学部分室にて所蔵。係員に利用方法を問い合わせて下さい。

新着図書(選)－教養

岩波文庫総目録　1927(昭和2年7月)―1987(昭和62年6月)　岩波文庫編集部編　岩波書店
米国マスコミのジレンマと決断　―報道倫理の日米比較―　F. マッカロック編　ビジネス社
認知科学選書　12, 音楽と認知(波多野誼余夫編)　東大出版会
役割交換書簡法　―人間関係のこじれを洞察する―　春口徳雄著　創元社
仏教挨拶手紙文例大事典　相馬泰全編　国書刊行会
松田壽男著作集　1―6　六興出版　1．砂漠の文化　2．遊牧民の歴史　3．東西文化の交流1　4．東西文化の交流2　5．アジアの歴史　6．人間と風土
データで読む英米人名大百科　―名前の栄枯盛衰―　レズリー・アラン・ダンクリング著　南雲堂
教養のための地理学トピックス　長谷川典夫著　大明堂
五〇歳から再開した山歩き　本多勝一著　朝日新聞社
深層の社会主義　―ソ連・東欧・中国　こころの探訪―　袴田茂樹著　筑摩書房
対人関係の心理学　大橋正夫編　有斐閣
フランス人とイギリス人　―人と文化の交流―　R. フェイバー著　法政大学出版局
子どもの人権と学校　―父母・市民・教師・弁護士たちの記録―　子どもの人権と体罰研究会　体罰と管理教育を考える会編　草土文化
祭り歳事記　同盟通信社
化学概論　多田耕三著　改稿第3版　学術図書
ポップアップ宇宙　―ビッグバンからブラックホールまで―　H.クーパー著　丸善
100億年を翔る宇宙　―ビックバンから生命の誕生まで―　加藤万里子著　恒星社厚生閣
地球史入門　小嶋稔著　岩波書店
ゴリラ　―森に輝く白銀の背―　山極寿一著　平凡社
発展途上国の工業化　―インドにおける工作機械工業の発展―　森野勝好著　ミネルヴァ書房
堀文子画文集　花，季，径　堀文子著　日本交通公社出版事業部
センダックの世界　S. G. レインズ著　岩波書店
韓國原形　―桑原史成写真集―　桑原史成著　三一書房
名曲ものがたり　上，下　志鳥栄八郎著　音楽之友社
歌舞伎事典　服部幸雄〔ほか〕編　平凡社
百の緑の中で　―二部治身の草・花・くらし―　二部治身著　文化出版局
おばんでした　―北海道方言の旅―　小野米一編　北海道新聞社
あなたの英語診断辞書　―英語における日本人共通の誤り―　松本安弘著　北星堂
啄木全作品解題　付・伝記研究の方法　岩城之徳著　筑摩書房
神様入門　井上光晴著　文藝春秋
滄海よ眠れ　―ミッドウェー海戦の生と死―　1～6　澤地久枝著　毎日新聞社
乳ガンなんかに敗けられない　千葉敦子著　文藝春秋
手錠　―ある警察官の犯罪―　宍倉正弘著　講談社
立原道造全集　全6巻　1．詩集1　2．詩集2　3．物語　4．評論・ノート・翻訳　5．書簡　6．雑纂)　立原道造著　筑摩書房
ジャック・ロンドン自伝的物語　J. ロンドン著　晶文社
ボブ・グリーンの父親日記　B. グリーン著　中央公論社

世界教養選集　全18巻　平凡社
―古今東西の名著70点を集録―

やっぱり五月病かなと思う学生のみなさんにちょっとカタイ本をおすすめします。落ちこんでいる時にそぐわないかもしれませんが，逆もまた真なり。

この選集は，分かり易い文章で書かれているものが多く，字も大きいので，とても読み易いのです。聖書やお釈迦様，孔子様が身近に感じてきます。

ずっと昔からイイナ―と読みつがれた本（古典）を読んで，世の中広くみませんか。そうしたらひょっとして五月病も軽くすんで…。

新　着　雑　誌

The Ainu Kenkyu（阿夷奴研究）　日本阿夷奴学会　1－4：大6／4月－大7／5月　（復刻：みやま春房，昭47／3月）

大審院判決録　明24－明25年（復刻：文生書院，昭61年）

大審院判決録　別冊　明28／9月－明29／10月〔復刻：文生書院，昭61年〕

大審院判決録　民刑合本　明26－明28年　（復刻：文生書院，昭61年）

大審院判決録　明治前期　司法省蔵　1（明8）－8（明12），明13（1－347）＋　（復刻：文生書院，明62／5月＋）

〔姫路独協大学〕姫路法学　姫路：1：1988＋

北陸大学紀要　金沢　11：1987＋

岩盤力学文献目録　（土木学会）　3：昭46，5：昭50，7－8：昭59－昭60

法政大学比較経済研究所研究シリーズ　1：1987＋

遺伝　別冊　1：1988＋

Japan People：日本人物年鑑　3：1987－88＋

人類学会報告　（東京人類学会）　1－4：明19／2－5月（復刻：第一書房，昭55／9月）

人類学会雑誌　（東京人類学会）
27－50（301－578）：明44／4－昭10年〔復刻：第一書房，昭57－昭和60〕

地震工学文献目録　（土木学会）1：昭46，4－9：昭51－昭62＋

開拓使日誌　（開拓使）　明2－明10年（復刻：東大出版会，昭62）

警視庁事務年表
明8年12月～明23年〔明治前期警視庁・大阪府支部社　警察統計　I－II，第2期Iの中〕　（復刻：柏書房，昭60／9－昭61／4）

経済連合　（経済団体連合会）
昭23－昭27年（復刻：文化図書，1987）

けんさいん：会計検査院広報　1：1988／3＋

憲政（憲政会本部）　1－8：大14（復刻：柏書房，1986／3月）

憲政公論（憲政公論社）　5－7：大14－昭2／5月（復刻：柏書房，1985）

〔近畿大学〕比較法・政治研究　1：1987＋

北九州大学大学院紀要　北九州市　創刊号：1988／3＋

駒沢大学北海道教養部考古学会紀要　岩見沢　1－3：1981－1983

京都府警察統計表（京都府警察本部）　明16－明23〔明治前期警視庁大阪府・京都府警察統計IVの中〕（復刻：柏書房，昭60／9）

三井銀行総合研究所年次研究報告　1987／88＋

長岡技術科学大学言語・人文科学論集　1：1987＋

年報いわみざわ　初等教育・教師教育研究（北海道教育大学岩見沢分校）　9：1987＋

2／2 club：　札幌　0号：昭63／2＋

農政時報（大日本地主協会）　1－95：大14－昭8（復刻：不二出版，1987／6月）〔日本近代農政史料集成15－18の中〕

大阪府警察統計表（大阪府警察本部）　明7／明13－明23年〔明治前期警視庁・大阪府・京都府警察統計III，第2期IIIの中〕（復刻：柏書房，昭60／9－昭61／4）

P＆T（Posts and telecommunications）（郵政省）1：昭63／4＋

〔札幌児童相談所〕研究紀要　2：昭62／11＋

青年心理　1－2，4，15－21，23－32，34－39，41－43，45－46，51－61，65－66：昭52－昭62

士別市立博物館報告　士別：6：1988＋

進歩党党報　1－27：明30／5－明31／6（復刻：柏書房，1985）

多国籍企業労働問題関係資料（日本労働協会）
13－15，17，19－22，24：昭54－昭59

他山の石（桐生悠々編）　1－8：昭9－昭16（復刻：不二出版，1987／9月）

東光技術時報　1：1988＋

徳島大学社会科学研究　1：1988／2月＋

徳島大学総合科学部自然科学研究　1：昭63／2月＋

北 駕 文 庫 其 の 一

北海学園大学附属図書館の古文書３万１千余冊

早 川 和 夫

１　北駕文庫の由来について

この文庫は明治44年に，当時の皇太子（後の大正天皇）が北海中学校に行啓されたことを記念した図書館であります。駕は貴人が来訪する意味で，北駕（ほくが）は皇太子が北海中学に来訪されたということ，また文庫は今様で言う図書館ですから北駕文庫とは皇太子北海中学校行啓記念図書館ということになります。

当時の北海中学校長・浅羽靖（あさばしずか）先生は一私立中学校であった北海中学校に行啓を仰いだことに深く感激し，この意義を永く後世に伝えるためには，文庫を建てて生徒が有益な書物に親しみ，青春時代を誤りなく過ごし，有為な人物を養成することだと考え文庫の実現に全力を傾けました。

昭和44年に一階石造建
大正５年に二階建に改築
現在北海学園資料室

浅羽先生は若い頃書物を読みたくても書物に不自由であったという経験から，こうした志を持ち続けていたことも大きな文庫創立の理由と推察することが出来ます。

当時札幌で公開された図書館は３カ所あり，蔵書数も6,000冊以下でありました。浅羽先生は明治42年当時から北海中学の図書充実のため，自分の蔵書は全て寄贈すると同時に友人，知人に呼びかけて図書を集めていました。

このような前々からの準備が実を結んで，現在見るように，木版本をはじめ和漢洋図書，書，画等が集積されるようになりました。

明治44年11月，蔵書15,143冊，１階建石造図書館（書庫12坪，閲覧室12坪）が遂に開館しました。これが北駕文庫であります。

続いて明治44年12月には山崎教諭を北駕文庫監督に，また吉川教諭を文庫書記に発令して，今で言う図書館長，図書館司書を配置しました。書物の収集は庫長自ら行い，その殆んどは東京の古本屋に出かけ買い求めたものと言われています。浅羽校長も図書集めの資金に苦労したと見えて，次のような感想を残しています。「嗚呼，購入スヘキ書類多シト雖モ資力足ラスシテ，其ノ志ヲ全ウスルコト困難ナリトス」。

大正３年に浅羽先生は北駕文庫を財団法人に移すために，設立願を文部省に申請しました。図書目録は大正２年の文部省，図書館書籍標準目録を参考にして冊数31,034冊（洋書と雑誌を含めて42,000冊）が掲載されています。又文庫は石造１棟（書庫12坪，閲覧室と廊下14坪）として申請されました。

財団法人の設立は大正２年10月19日に認可になりましたが，残念なことに認可の３日後に，浅羽先生は世を去りました。浅羽先生の私費で経営されていた文庫は財政に行き詰まり，大正４年に北海中学校長戸津高知先生が文庫を代表し財団を解消し，文庫を北海中学校に寄附し，北海中学校が維持経営することになりました。昭和27年北海学園が設立認可されてから同学園本部事務局が管理していましたが，北海学園大学の設立により，大学図書館に北駕文庫を蔵書として収納し，貴重な学術文献として研究者の利用を待っています。

明治44年に建てられた１階石造建の文庫は大正５年に２階建に改修され，昭和30年に大学と北海高校の間に移築され，現在は就職部の南側に建っています。

北駕文庫の蔵書は新図書館に収蔵され，北海学園大学の誇る文献であると同時に，北海道に在る貴重な木版書であり，北海学園を訪れる大学関係書が深い関心を寄せている文庫であります。

北駕文庫はすべての分野の学術文献を含んでいますが，次回から３回に分けて北駕文庫の理工学書（鉱物，天文，一般科学）の書誌解題という形で解説させていただきます。次回は徳川時代の鉱物事典・雲根志について述べます。

（はやかわ　かずお　工学部教授）

北海学園大学附属図書館報　**図書館だより**　Vol. 10 No. 1（通巻105号）
本館　〒062　札幌市豊平区旭町4丁目1番40号　**工学部分室**　〒064　札幌市中央区南26条西11丁目
☎(011)841―1161　本館内線　270～275・279　工学部内線　813・814